

# 日本計量生物学会ニュースレター第 101 号

2009 年 11 月 30 日発行  
2009 年 12 月 9 日改定

## ～・～・～・～・～・目次～・～・～・～・～

- ① 巻頭言「分類思考と統計思考がまじわるとき」
- ② 日本計量生物学会 2009 年度理事会議事録
- ③ 2009 年度統計関連学会連合大会報告
- ④ 2009 年日本計量生物学会賞受賞者の紹介
- ⑤ 2009 年度統計関連学会連合大会 参加報告
- ⑥ 2009 年度日本計量生物学会年会参加報告
- ⑦ 関連国際学会のお知らせ
- ⑧ 学会誌「計量生物学」への投稿のお誘い
- ⑨ 2010 年の年会のお知らせ
- ⑩ 編集後記

～・～・～・～・～・～・～・～・～・～・～・～・～・～

## 巻頭言「分類思考と統計思考がまじわるとき」 三中信宏 (独立行政法人農業環境技術研究所)

「分類」とは人間であるならば誰も無意識のうちに行なっている行為であり、「分類学」という科学の一領域よりもっと裾野の広い世界がそこには広がっている。分類行為の本性に光を当てることは、ヒトそのものの心の深奥部を覗き込むことにほかならないと私は考えている。ヒトの心は進化の産物である。そして、ヒトが進化してきた過程で、周囲の世界や現象や存在物をどのように整理し記憶し体系化するかが原初的な分類思考の姿だったにちがいない。しかし、「そもそも分類とは何か?」、「どんな分類が望ましいか?」、あるいは「分類されたものは実在するか?」というような曖昧模糊とした問題群を抱え込んだ「分類思考」の世界を正面から論じることは実は容易ではない。

つい最近、私は『分類思考の世界:なぜヒトは万物を「種」に分けるのか?』という新刊を講談社現代新書の一冊として上梓した。この本では、分類されるオブジェクト(対象物)が何であっても人間が無意識のうちに発動させてしまう「分類思考」がいかなる性格を帯びているかをさまざまな視点から論じている。興味深い点は、本来は連続しているものをわれわれ人間は適当に切り分けて「離散化」してとらえていること、そしてその離散化されたカテゴリーがさも自然界の中に実在しているかのように考えてしまう「心理的本質主義」である。

たとえば、生物分類学を例にとろう。アリストテレス以来の長い歴史を持つこの学問分野は、18 世紀のカール・フォン・リンネによる命名方式の構築を経て、近代的な分類学として存続してきた。自然界の生き物を分類するとき、分類学者たちは「種(species)」のような分類カテゴリーを用いて整理をする。しかし、そもそも「種」とは何なのだろうか? 拙著の姉妹書として三年前に出した『系統樹思考の世界:すべてはツリーとともに』(講談社現代新書)で論じたように、すべての生物が「系統樹」という祖先子孫関係によって連続的に連なっているとき、そのような生物界全体を「種」(あるいは「属」、「科」、「目」のような高次分類カテゴリー)によって切り分けるという行為は、どのように弁明しても恣意的にならざるを得ないのではないか。

現在広く利用されている多変量解析の一手法に「クラスター分析」がある。今では汎用性の高い解析ツールとしてさまざまな問題に適用されている手法だが、その歴史的ルーツはほかならない生物分類学にたどることができる。1957 年、米

カンザス大学に所属していた昆虫学者 Robert R. Sokal と Charles D. Michener は、当時の主観的な生物分類学の方法論を刷新する目的で、数値コード化された形質に基づく分類対象(OTU)間の全体的類似度からデンドログラムを計算する理論とアルゴリズムを公表した。この論文が手法としてのクラスター分析のルーツであり、同時に「数量表形分類学」とよばれる生物分類学派の旗揚げともなった。

その後の表形学派の運命は決してバラ色ではなく、1960 年代から 70 年代の激しい論争に破れたのち、現在の生物分類学の中でクラスター分析が占める位置はほんの小さなものになっている。しかし、その苦い経験は結果的には吉に転じた。統計手法としてのクラスター分析は「生物分類」という世界を脱却して、もっと広大なデータ解析の世界に進出することによって、初めて自らの世界を作り上げることができたのだから。

統計学的な検定法や分析法には必ず開発者がいる。彼らはデータ解析の個別具体的な問題に取り組む中で、従前のやり方を乗り越える新たな理論や方法を生み出そうとした。しかし、いったん生み出された検定や手法は、その後の普及や実用の過程で自らの歴史を刻み始める。進化生物学的に見るならば、科学理論もまたひとつの「概念的系譜」をたどる“生き物”として、その誕生と成長そして絶滅を論じることができる。生物分類とクラスター分析を通して垣間みる分類思考と統計思考の歴史的接点は、統計的手法もまた科学社会学的な運命に翻弄される存在であることを再認識させてくれる。

## ②日本計量生物学会 2009 年度理事会議事録 大橋靖雄・浜田知久馬(庶務担当理事)

### ○日本計量生物学会 2009 年第 4 回対面理事会議事録

日時: 2009 年 9 月 6 日(日)16:30~18:30  
会場: 京都大学医学部 G 棟 3 階 医療統計集会所  
出席: 佐藤, 和泉, 上坂, 大橋, 大森, 菅波, 服部, 浜田, 松井, 松山, 三中, 森田, 山岡, 森川(監事)  
欠席: 巖(委任状), 酒井(委任状), 丹後, 三輪(監事)

### 議事:

#### 1. 会長, 庶務担当理事からの報告

庶務担当 浜田理事から、応用統計学会年会の後援、応用統計学会チュートリアルセミナーの後援、日本計算機統計学会のセミナー後援についての報告があった。

また、佐藤会長から IBC Council 候補の推薦についての報告があり、会員に対して、JBS メーリングリスト、学会等を通して、個人名をあげずに日本からの候補者への投票のお願い、投票方法の説明をすることになった。

#### 2. 企画担当理事からの報告

企画担当理事より、11 月 28 日に京都大学医学部にて当初 5 月の計量生物学会年会で予定されていた特別セッションとチュートリアルセミナーを開催するとの報告がなされた。応用統計学会には既に後援を依頼しているが、計算機統計学会にも庶務理事から正式な後援依頼をする。また一般論として、後援をする条件(費用負担がない、会員にとって何らかのメリットがある)についても確認がなされた。

11 月 27 日には京都市キャンパスプラザにて、第 2 回計量

生物講演会を京都大学医療統計分野と共催で開催する。計量生物セミナーについては、本年度は下半期の企画が多いので行わない。

### 3. IBC2012について

本部からの LOC の正式な承認がまだないことが報告された。

### 4. 編集委員会報告

編集担当 松井理事より、「計量生物学」30 巻1号が 6 月 30 日に発行されたことの報告と、現在の投稿状況の説明がなされた。

また、電子ジャーナル化に関連して、著作権の帰属や電子ファイルの保存状況についての報告がされた。電子化作業以前の古い論文は、現物をスキャナーで読み取るしかなく、松井理事が事務局にバックナンバーの保存状況を確認することになった。著作権の問題、電子ジャーナル化については、J-stage の利用を含めて引き続き検討することになった。

### 5. 会報について

会報担当 和泉理事から 7 月末日でニューズレター第 100 号を発行したとの報告があった。次のニューズレター第 101 号は 11 月末日に発行予定で、会員に依頼して、連合大会への参加報告記事と、学会賞の授賞式の写真を掲載する予定と伝えられた。

### 6. 学会ホームページリニューアルについて

佐藤会長より、候補業者 2 社からの提出を受けたそれぞれ 2 価格帯の予算に対しての見積もり内容が示された。値段の違いは、コンテンツの英語化の範囲によっている。庶務担当理事が、更新の方法、維持料、追加で翻訳した場合の費用等を業者に確認して、引き続き審議することになった。

### 7. 会員名簿の作成

庶務担当 浜田理事、会計担当 菅波理事より報告がなされた。

会員名簿については、事務局が把握している個人情報に印字して、会員に郵送して確認してもらう。会員番号、氏名、会員種別、勤務先、勤務先住所は名簿に記載することを連絡し、その他の情報については、会員が希望しないとの返答があった場合は、名簿には記載しないこととする。

2010 年度以降、国際学会誌は、原則、電子ジャーナルのみとなるが、紙媒体での郵送を希望するかどうかで会費の額が変わるため、会員名簿作成確認事項と同時に調査する。雑誌の入手方法、会員名簿作成確認事項の調査は年内を目標に行う。

### 8. 2010 年度会費について

IBC の学会誌提供方法の変更に伴い 2010 年から変更される国際会費について、国際正会員の会費は、国内会費 6000 円 + 60 \$、更に紙媒体での郵送を希望する場合には、10 \$ を加算するとの案が出された。また本部で、学会に 10 年以上所属して、退職した会員には、会費が半分になるシニア会員が検討されていることが報告された。

### 9. その他

#### ・学会案内パンフレットの作成

庶務担当 浜田理事から、情報 2009 年版学会案内パンフレットが示され、今後、パンフレットが必要な場合は、浜田理事まで依頼するように報告された。

#### ・保育室の検討

和泉理事から連合大会の保育室の状況が説明された。本学会の規模では、保育室(ベビーシッターによる託児サービス

の提供)は難しく、また、一般の休憩室の利用は、子供を同伴する場合、遠慮がちになると考えられる。ゆえに、年会の事前申込時に希望があれば、保育室ではなく、子供を連れた保護者が利用しやすい休憩室を別に設けることが提案され、2010 年度年会については、休憩室の設置を検討することになった。

## ③2009 年度統計関連学会連合大会報告

### 和泉志津恵, 上坂浩之, 大森崇, 服部聡, 三中信宏(企画担当理事)

2009 年度の統計関連学会連合大会は、9 月 6 日から 9 日にわたり、同志社大学において行われました。6 日には今出川キャンパスにおいて、二つのチュートリアルと市民講演会が行われました。チュートリアルのひとつは計量生物学会の企画による「ノンパラメトリック回帰入門」で、竹澤邦夫氏(中央農業研究センター)により、ノンパラメトリック回帰の解説が行われました。平易な語り口によるスプライン関数を中心としたノンパラメトリック回帰の理論的な説明と R によるプログラムの紹介がありました。

7 日から 9 日には、京田辺キャンパスにおいて企画セッションならびに一般セッションが開催されました。今年度は新型インフルエンザの影響により 5 月に予定されていた年会が延期となり、計量生物学会は年会として統計関連学会連合大会に参加いたしました。年会で発表を予定していた会員の多くが、連合大会において一般講演を行っていただきました。そのため、計量生物学関連の発表件数が非常に多くなり、9 つのパラレルセッションにより進行されました。複数の計量生物学に関するセッションが同時に開催される場合もあり、聞きたい講演を聞くことができなかつた方も多かつたかと思えます。計量生物学会からは以下の企画セッションが企画されました。

### ○日本計量生物学会シンポジウム「感染症対策における計量生物学の貢献」

インフルエンザを含む感染症の問題は、社会的に極めて重要な問題で、様々な側面で計量生物学的な方法が本質的な役割を果たしています。このセッションでは、藤田利治氏(統計数理研究所)に座長をお願いし、4 人の専門家の先生方にそれぞれの専門分野での計量生物学の貢献について講演いただきました。このセッションの企画は、新型インフルエンザが発生する前に進められていたのですが、その後大きな社会問題となったこともあり、非常に多くの方に参加いただきました。橋本修二氏(藤田学園保健衛生大学)からは、感染症対策の基礎となる感染症発生動向調査のためのサーベイランスシステムについて、日本の現状とそこで実際に用いられている計量生物学的な方法についての概説がなされました。高橋邦彦氏(国立保健医療科学院)からは、講演者らが進めている空間疫学手法に基づくクラスター検出の方法について、実例を交えた丁寧な解説がなされました。また、講演者が提案されている柔軟性の高い方法の紹介もされました。松尾富士男氏(スタットコム株式会社)には、ワクチンの開発の現状と最近の話題の概説をしていただきました。ワクチンの有効性の評価は、感染予防効果があるか否かにより評価するべきではあるが、ワクチンの有効性には免疫応答が関与することから、免疫応答により評価されることが多く、免疫応答の代替性の統計学的評価が重要となるなどの、いくつかの計量生物学的な問題の紹介をしていただきました。岸野洋久氏(東京大学)からは、感染症に関する講演者自身の様々な研究が紹介されました。いずれの研究も統計的なモデリングが本質的な役割を果たすものであり、講演者の言葉によると「病原体の気持ちに

なったモデル」の構築が重要であるとのことでした。例えば、ウィルスの配列進化と構造変化のモデリングでは、接触過程を模倣した微分方程式による数理モデルの有用性に関するお話がありました。



シンポジウムにて講演を行う高橋邦彦氏

#### ○「日本計量生物学会賞受賞者講演」

日本計量生物学会賞受賞者である三輪哲久氏の講演は、多重比較に関する最近の動向に関して、演者が思っていることはどのようなことかというものでした。多重比較の方法の一つとして最近広く普及し始めた False Discovery Rate (FDR) の発想と多重比較という考えとしては誤りであると指摘されてきた Duncan の方法の過誤確率の制御方法の関係を、その歴史とともにわかりやすく説明してくださいました。



受賞者講演を行う三輪哲久氏

#### ○「2009 年度学会賞授与式」

2009 年度学会賞授与式では、日本計量生物学会賞受賞者である丹後俊郎氏のご病気で御欠席のため、山岡和枝氏のご本人から預かったメッセージを代読されました。丹後俊郎氏には、2010 年度の年会において、日本計量生物学会賞受賞者講演を行っていただく予定です。

#### ○「日本計量生物学会奨励賞受賞者講演」

2009 年度の日本計量生物学会奨励賞を受賞した岡村寛氏(遠洋水産研究所)、竹内久朗氏(田辺三菱製薬株式会社)、蔡志紅氏(日本イーライリリー株式会社)より、それぞれの受賞対象論文についての講演が行われました。通常の一般講演よりも長い時間で講演が行われ、いずれの講演も研究の背景からわかりやすく説明されており、有益であったと感じた参加者が多かったように思われます。いずれの講演も受賞者講演にふさわしくレベルが高いものでした。受賞者の今後のご活躍を期待いたします。

#### ④2009 年日本計量生物学会賞受賞者の紹介 上坂浩之(学会賞担当理事)

2009 年の日本計量生物学会三賞(日本計量生物学会賞、奨

励賞、功労賞)を以下の方々が受賞されました。授賞式は、5月21日の年会における総会にて執り行われる予定でしたが、新型インフルエンザのため年会開催が中止となったことより、9月7日の統計関連学会連合大会における年会にて執り行われることとなりました。

日本計量生物学会賞 丹後俊郎氏(国立保健医療科学院)  
奨励賞 岡村 寛氏(遠洋水産研究所)、蔡 志紅氏(日本イーライリリー)、竹内久朗氏(田辺三菱製薬)(50音順)。

功労賞 吉村功氏(東京理科大学名誉教授)

奨励賞は、日本計量生物学会誌、Biometrics, Journal of Agricultural, Biological, and Environmental Statisticsに掲載された論文の著者の中から学会賞選定委員会により推薦され、3月の理事会にて承認されました。



奨励賞授賞式 右から竹内久朗氏、蔡志紅氏、岡村寛氏

以下に日本計量生物学会賞および功労賞受賞者を紹介いたします。

#### ○日本計量生物学会賞受賞者 丹後俊郎氏(国立保健医療科学院技術評価部部长)

丹後俊郎氏は1975年に東京工業大学大学院理工学研究科修士課程を卒業された後、東京都臨床医学総合研究所疫学部研究員、国立公衆衛生院疫学部理論疫学室室長を経て、国立公衆衛生院が改組され国立保健医療科学院となった後、同科学院技術評価部部长として現在に至っております。また1982年に東京大学より医学博士号を授与されました。この間国立公衆衛生院では附属図書館長も兼任されたほか、東京大学医学部、慶応大学理工学部及び医学部、広島大学医学部にて非常勤講師を勤められ、中央薬事審議会新医薬品審査委員、その他多数の委員を勤められてきました。

丹後俊郎氏は疫学、臨床医学分野における優れた研究業績を多数上げてこられました。空間疫学における疾病発生の集積性を評価する Tango Index は、集積性評価の指標として、Encyclopedia of Statistical Science, The Cambridge Dictionary of Statistics に採録されています。氏の考案された臨床検査値の基準範囲設定法は検査システムに使用されています。さらに疫学、臨床試験、臨床研究に関する研究論文を、Statistics in Medicine, Biometrics などの生物、医学統計の主要国際雑誌、及び計量生物学誌などに多数発表されています。また医学統計の実践ならびに方法論の両面にわたる多数の著書、ハンドブックの編集者等もされており、生物・医学統計学の発展にも貢献されています。これらの優れた学問的業績を讃えて2009年の学会賞を授与されました。



日本計量生物学会賞受賞者丹後氏が欠席のため、メッセージを代読する山岡和枝氏

#### ○功労賞受賞者 吉村功氏(東京理科大学名誉教授)

吉村功氏は1964年東京大学大学院数物系研究科応用物理学専門課程を修了され工学博士を授与されました。同年東京大学工学部計数工学科講師となられた後、名古屋大学工学部助教授、東京理科大学工学部教授を歴任され、2008年東京理科大学名誉教授となられ、今年3月同大学を退職されました。この間、厚生省、厚生労働省、文部省、日本学術会議等の委員を歴任され、また名古屋大学、名古屋工業大学、大阪大学、東京大学、東京工業大学などで非常勤講師も勤められています。1976年12月から国際統計協会の招待教授としてIndian Statistical Instituteに4ヶ月滞在されました。多数の国内学会の委員を歴任されるとともに、1997年から2000年まで日本計量生物学会会長を務められました。研究業績に関して日本経済新聞品質管理文献賞、prize for best paper、日本動物実験代替法学会論文賞などの論文賞のほか、2004年に日本計量生物学会賞を受賞され、また2006年に東京都功労者表彰、2007年に大内賞を受賞されています。

吉村功氏は、公害問題、環境問題、薬害問題などの、人の社会生活にかかわる問題の解決のために、統計家として積極的に取り組まれ、社会への発言を続けられました。また、医薬安全性研究会の創設と継続、医薬品の審査に関わる各種の委員、統計ガイドライン作成委員、東京理科大学における医薬統計コースの設置と大学院教育など、医薬品の審査ならびに開発における統計的方法の実践と普及及び専門家の育成にも尽力されてきました。さらに日本計量生物学会会長を務められ、学会発展に尽くされています。このような長年に渡る生物・環境・医薬ならびに当学会への貢献を讃えて2009年の日本計量生物学会功労賞を授与されました。



功労賞を受賞した吉村功氏

奨励賞に対する寄付として万有生命科学振興国際交流財団から寄付を受けました。

#### ⑤2009年度統計関連学会連合大会 参加報告 川口淳(久留米大学バイオ統計センター)

2009年9月6日から9月9日の4日間、少し秋めいてきた京都、同志社大学で開催された2009年度統計関連学会連合大会に参加してきました。初日は今出川キャンパスで行われたチュートリアルセッションの「ノンパラメトリック回帰入門」に参加しました。ノンパラメトリック回帰は常日頃から興味を持っており、ハット行列による回帰診断やスプラインによる回帰モデルなど、充実した内容にとても勉強になり私の研究に役立ちそうだと期待が高まっています。二日目からは京田辺キャンパスに場所を変え研究発表が始まりました。私は京都駅近くに宿をとっていましたが、そこから会場までは近鉄で揺られること約30分、京田辺駅からは無料循環バスでキャンパスまで10分程度といった行程でした。キャンパス直前ではある程度体力に自信がないと苦しそう急な坂が待ち受けており循環バスに助けられました。会場に着いてからは久留米大学から出された7つの演題を含むバイオ統計学に関連した話題を中心に拝聴しました。主に医学統計セッションにいたのですが、この会場は満席で立ち見が出るほどでした。以前からこのような入りだと聞いていたので、こういう場での発表はいい経験になると思い狙って発表申し込みをし、三日目午後の医学統計(2)のセッションで発表を行いました。今回の発表は当初は5月に開催予定だった2009年度日本計量生物学会年会で発表するつもりでしたが中止となりスライド登板させた内容でして、2006年から2年間の留学時から継続してDepartment of Biostatistics, University of North Carolina at Chapel HillのGary Koch教授との共同で行っている臨床試験における治療効果の比較法開発プロジェクトの1つで、3期4群クロスオーバー試験における2種類の治療効果の比較をベースライン測定の見直しつつノンパラメトリック法で行うというものです。発表後には座長の西川先生より専門的な質問とコメントを頂きました。またセッション後にもいくつかコメントを頂き、客観的な意見を取り入れることができ発表の効果があつたと思っております。本プロジェクトは継続的に行っていますので、その成果を日本計量生物学会年会などで発表していきたいと思っております。

#### ⑥2009年度日本計量生物学会年会 参加報告 安齋達彦(国立保健医療科学院 専門課程 生物統計分野)

2009年9月6日から9日までの4日間、京都の同志社大学今出川キャンパス(6日のみ)ならびに京田辺キャンパスにおいて、日本計量生物学会の2009年度年会が執り行われました。同年5月に開催予定であった今大会は、同月より蔓延し始めた新型インフルエンザの影響により延期され、例年シンポジウムとして行っていた統計関連学会連合大会に、5月に予定されていた一般講演も組み込まれ開催されました。京田辺キャンパスは非常に広く連合大会を開くのにふさわしいキャンパスを持ち合わせたキャンパスでした。私は日本でこのような大規模な学会に参加するのは初めてであり、発表は行わず聴講のみでの参加となりましたが、勉強になることが多くある学会でした。

今学会ではシンポジウムとしてかなりホットな話題である感染症に関する検討が行われました。現在新型インフルエンザ

に注目が集まっていますが、それ以外にも様々な感染症があり、感染症全般に通じる議論がなされました。セッションは感染症発生動向の観測・状況把握の議論(藤田保健衛生大学・橋本先生)に始まり、その集積性検定に関する議論(国立保健医療科学院・高橋先生)、ワクチンの臨床開発・評価に関する検討(スタットコム株式会社・松尾先生)、そして遺伝子レベルでのウィルスの変化に関する解析方法(東京大学・岸野先生)とシンポジウムの中に感染症に対抗するひとつのストーリーがあり興味深いものでした。各発表後には様々なディスカッションがあり、実際にこのディスカッションが科学の発展のみならず、行政、または企業を通じて実社会に貢献をする事に非常に近いところにあると感じました。アカデミックな発見を目指すとともに実社会への適用を視野に入れた研究というのが必要であることを再認識しました。

また昨年度の学会賞を受賞された農業環境技術研究所の三輪先生は多重比較についてご講演され、非常に熱く語られていました。結果を大きく左右する多重比較についてはしっかりとした認識が必要であり、その重要性を強く感じるものとなりました。今年度は国立保健医療科学院の丹後先生が、生物統計に関する多大な貢献が評価され学会賞を受賞されました。私も先生の下で学ばせていただいているものとして次回の計量生物学会においての先生の受賞者講演が楽しみです。

私は生物統計に関する勉強を4月より始めたばかりで、ベースとなる知識も不足したままの学会参加ではありましたが、今回多くの刺激を受けました。学会全体を通して、統計関連学会連合大会に組み込まれて行われたため多くの参加者があり、発表後のディスカッションに留まらずいたるところで議論がされていました。ことに計量生物に関するセッションには座りきれないほどの参加者があり、注目の集まっている分野であることを再認識しました。全国様々な分野で活躍されている先生方ほど学会に参加し、議論を行い、科学的な進歩に貢献しているのだと感じました。今後私自身、生物統計を生かせる業種への就職をしたいと考えておりますが、学会の場だけでなくディスカッションをし、研究を進展させ、より広い社会に適用させる場があることを強く期待しています。

## ⑦関連国際学会のお知らせ

国際担当理事 丹後俊郎・松山 裕・山岡和枝

### ○East Asia Regional Biometric Conference 2010 (第2回東アジア国際会議 EARBC2010)のご案内

第2回東アジア国際会議 EAR-BC2010が2010年2月12日-13日にインド・マニパル大学で開催されます。IBSインド支部の年会と併せての開催であり、前日の2月11日にはpreconference seminarも予定されています。奮ってご参加ください。

First CircularはRegistration Formとともに学会ホームページ掲載してありますのでご参考ください。

[http://wwwsoc.nii.ac.jp/jbs/index\\_i.html](http://wwwsoc.nii.ac.jp/jbs/index_i.html)

### ○XXVth International Biometric Conference (第25回国際計量生物学会 IBC2010)のご案内

2010年12月5日(日)~10日(金)までブラジル・フロリアノポリス サンタカタリナ大学で開催されます。サンタカタリナ島はブラジルの南の方に位置しており「魔法の島」という愛称で知られる避暑地です。また、IBCは2年に一回の国際会議でその次(2012年)は神戸で開催される予定です(IBC2012)。奮ってご参加ください。

IBC2010の演題申し込みは2010年1月4日から4月16日までとなっています。詳細はWEBページをご覧ください。

<http://www.rbras.org.br/~ibcfloripa2010/>

### ○International Society for Clinical Biostatistics 2010 (2010年国際臨床統計学会 ISCB2010)のご案内

ISCBの年会(ISCB2010)が8月29日~9月2日までフランス・モンペリエ Montpellier SupAgro Campus で開催されます。この学会で発表した報告はStatistics in Medicineに投稿することが推奨され、査読でacceptされれば特集号として掲載されます。奮ってご参加ください。

演題申し込みは2009年12月15日から2010年3月1日までとなっています。詳細はWEBページをご覧ください。

<http://www.iscb2010.info/>

## ⑧学会誌「計量生物学」への投稿のお誘い

松井 茂之 (編集担当理事)

本学会雑誌である「計量生物学」に会員からの積極的な投稿を期待しています。会員のためになる、会員相互間の研究交流をより一層促進するための雑誌をめざすため、以下の5種類の投稿原稿が設けてあります。

### 1. 原著 (Original Article)

計量生物学分野における諸問題を扱う上で創意工夫をこらし、理論上もしくは応用上価値ある内容を含むもの。

### 2. 総説 (Review)

あるテーマについて過去から最近までの研究状況を解説し、その現状、将来への課題、展望についてまとめたもの。

### 3. 研究速報 (Preliminary Report)

原著ほどまとまっていないがノートとして書き留め、新機軸の潜在的な可能性を宣言するもの。

### 4. コンサルタント・フォーラム (Consultant's Forum)

会員が現実に直面している具体的問題の解決法などに関する質問。編集委員会はこれを受けて、適切な回答例を提示、または討論を行う。なお、質問者(著者)名は掲載時には匿名も可とする。

### 5. 読者の声 (Letter to the Editor)

雑誌に掲載された記事などに関する質問、反論、意見。

論文投稿となると、「オリジナリティーが要求される」、「日常業務での統計ユーザーにとっては敷居が高い」などを理由に二の足を踏む会員が多いかもしれませんが、上記の「研究速報」、「コンサルタント・フォーラム」は、そのような会員のために設けられた場であり、活発に利用されることを特に期待しています。いずれの投稿論文も和文・英文のどちらでも構いません。投稿に際しては、雑誌「計量生物学」に記載されている投稿規程を参照ください。

2004年度から学会に3つの賞が設けられ、その一つである奨励賞は、「日本計量生物学会誌、Biometrics, JABES」に掲載された論文の著者(単著でなくても第1著者かそれに準ずる者)で原則として40歳未満の本学会の正会員または学生会員を対象に、毎年1名以上に与えられる賞です。最近、履歴書の賞罰欄に「なし」と書くとき公募の際に引け目を感じるくらいです。ここ数年、「計量生物学」に掲載された論文が受

賞しており、今後もその傾向は続くと思込まれます。

また、日本語での総説論文は、多くの会員に有益な情報を提供するものであり、大いに歓迎されます。

会員諸氏の意欲的な論文投稿をお待ちしております。

## ⑨2010年の年会のお知らせ

### 上坂浩之(企画担当理事)

2010年の日本計量生物学会年会は、5月21日(金)午後より22日(土)夕方までの予定で、移転した統計数理研究所(東京都立川市)にて開催します。5月20日(木)に応用統計学会年会が、また21日(金)の午前に日本計量生物学会と応用統計学会の合同のチュートリアルセミナーが、同一会場にて開催される予定です。年会では特別セッション、特別講演、ならびに研究発表、総会が予定されています。多数の皆様の研究発表ならびに参加をお待ちしております。詳細は追ってお知らせいたします。

## ⑩編集後記

今年は Charles Darwin が「On the Origin of Species by Means of Natural Selection, or the Preservation of Favoured Races in the Struggle for Life」を上梓してから150周年にあたります。科学が人類に与えた影響の大きさという意味ではおそらく1, 2を争う書籍ではないでしょうか。「種の起源」—進化論は聖書以来、最大の影響を人類に与えたと言う人がいるのも肯けます。

1881年(明治14年)に「人祖論」(神津専三郎纂訳)として抄訳されたものが日本で最初に「種の起源」が訳出された事例です。厳密に言えば「進化論」そのものは1879年(明治12年)に出版されたハックスレー著『生物原始論』(伊澤修二訳)で本邦に初めて紹介されました。「種の起源」の完訳版は1896年(明治29年)のチャールズ・ダーウィン著『生物始源一名種源論』(立花鉄三郎訳)となります。編集者もこの明治29年版の『生物始源一名種源論』を家蔵していますが、訳者の立花鉄三郎は福岡県の出身で、1867年(慶応3年)生まれ、夏目漱石とは予備校時代からの同級生であり、東京帝国大学哲学科を卒業し、のち学習院教授を務める人物です。

2003年4月14日にヒトの全ゲノムが解読されました。いまや基礎医学系の研究ではゲノム全体から疾患感受性遺伝子を同定するために遺伝統計学(ファーマコゲノミクス)がもてはやされ、癌の遺伝子研究では、Bonferroniの多重性調整で1万分の0.05などという途方もない有意水準で検定がなされています。Michielsらの報告(Lancet 2005; 365: 488-92)では、一流紙に発表されたこの分野の7研究中5研究は偶然一致と同程度であると指摘しており、NCIのSimonらの報告(J Natl Cancer Inst. 2007 Jan 17;99(2):147-57. Review.)でも同じく大部分の論文は間違いであるとこちらもかなり手厳しい論調です。

ここ2, 3年大きな話題となり、数えきれないワークショップやシンポジウムでセッションが組まれた Adaptive Design についても、加熱期は過ぎ、落ち着いてその適用場面が論じられるようになってきた感があります。そのなかで臨床試験の Learning Phase での検定至上主義から緩やかに推定重視の方向に向かう兆しも見え始めています。許認可行政のなかで検証段階における検定は必要な手段ではありますが、探索段階、特に用量反応試験ではもっと Bayes 流のアプローチが活用されてよいように思われます。その一方で、Model Based Drug Development(MBDD)が熱く語り始められました。

FDAではすでにPharmacometrics sectionを設け、積極的に製薬企業に対しても試験デザインのコンサルテーションを行っています。80年代後半から90年代前半にかけて Population Pharmacokinetics (PPK) がさかんに出てきた時期がありましたが、当時 FDA CDER の director で PPK 推進派だった Carl Peck 氏(現・UCSF 教授)が93年にFDAを去るや急速に PPK のご威光が薄れて行くと言ったようなことがありました。FDA は大きく振り子が振れて極端な方針変更があるので注意が必要ですが、現在彼らが MBDD に注目していることだけは確かだと言えるでしょう。

1901年に Karl Pearson と Francis Galton (ご存知の如く、Charles Darwin の従兄弟)が Biometrika を創刊したときには、遺伝関係の記事が74%、医学関係の記事はわずか7%であったということですが、いまや医学研究にかかわらない統計記事を探す方が難しい状況です。

「生物統計学」も確実に「進化」しています。

次号は、梅の花の綻ぶ時季に発行予定です。

日本橋の河岸より

計量生物学会ニュースレター101号  
2009年11月30日発行  
発行者 日本計量生物学会  
発行責任者 佐藤俊哉  
編集者 酒井弘憲, 和泉志津恵